
 論 文

「畑中美穂の村山語録 2020Ver.」： 一ゼミ修了生からみた村山正治先生の教育スタイル

畑中美穂*1・村山正治*2

要 旨

本稿では、東亜大学大学院で村山ゼミ生であった畑中が、村山から指導を受けた際のゼミや講義での言葉から村山の指導の特徴を描き出すことを目的とした。主に、畑中が大学院を修了してから参加した2回のゼミ発表の機会での村山の本音をもとに、畑中の院生としての歩み、「自分の内側にある力」についての論述、ゼミ生の成長、「書く」ということについての考察等を通じ、村山の教育スタイルや person-centered な在り方を浮かび上がらせた。そこには、学生を“個”、つまり『Only one』の存在としての信頼に基づく歩みからくる村山独自の視点による学生指導が特徴づけられている。

キー・ワード：村山正治、語録、教育スタイル

I. はじめに

心理臨床家の村山正治は、主に不登校の中学生との心理臨床からスタートして、大学院修了者としては日本初の京都市教育委員会でのカウンセリングセンター勤務、Rogers の研究所客員研究員時代 (Center for studies of the Person ; Visiting Fellow) を経験し、九州大学以降、長年にわたり大学教員として歩んできた。その教育哲学ともいえるのは、自身の京都大学学部生時代の経験からくる『てめえの得意なこと勝負しろ』という“個”、つまり『Only one』の存在に対する信頼に基づく歩みからくる村山独自の視点による学生指導である。

本稿では、東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理学専攻に2013年4月~2018年9月に村山ゼミに在籍した畑中が、村山のゼミや講義で

の言葉を織り交ぜながら指導の特徴を描き出すことを目的とする。なお以下の項は、村山(V)と畑中(II、III、IV、VI)がそれぞれに執筆を担当した。また村山の本音を『 』、固有名詞としてのRogers個人を指すのではなく概念としてのRogersを表す場合に《Rogers》と記す。

II. タイトルに込められた思いと経緯； 畑中

タイトルに自分の名を冠することに甚だ臆するものがあるが、まずこのことについて述べる。村山先生に学んだ者は数多おり、その数だけ存在する語録の、これはその一つである“畑中美穂の”村山語録なのだということである。個々人はそれぞれ背景も抱く想いも異なる『Only one』(それこそ先生の言葉である!)の存在であるように、心に留まる言葉やなぜそ

*1 心といのちの性教育研究所/Lab. for psychological sex education, Mind and Life

*2 東亜大学大学院 総合学術研究科

うなのかは異なる。この語録を通じて、私からみた先生の教師としての在られようを表したいと思った。タイトルの原案は元々、村山先生からいただいたのであるが、これらのことを示す意味でもこのタイトルをつけることが相応しいと思うのである。

さて、私は30年来の助産師であり、社会人学生として本学に在学し、ライフワークである性教育をテーマにした論文で博士の学位を修めた。入学当初、私にとって臨床心理学は未知のものであり、講義は新しい学びの連続でとても新鮮であった。一方で村山ゼミに在籍して先生の傍に居りながら、《Rogers》について先生に問うことができずにいた。例えば明らかにこれは「いいね」とは言えない状況や事柄に対して、「いいね」という“場の雰囲気による肯定”が起こることが度々あった。これは《Rogers》が人を肯定する時の態度と同じなのだろうか？ 受ける側の本人にとってその実感が伴っていないと、逆に「わかってもらえていないのではないか」と思ってしまう。言葉上は肯定されているようで、「“いいと思えない自分”は“よくない”のか？」と考え込むことがあった。ここで無理やりに同意してしまうと、私が私の“自分である感じ”を保てないような気がした。言ってしまうと、“気持ち悪かった”のである、ゴロゴロでフィットしていない服を着ているようで（!）”。もしもこれが《Rogers》なのだしたら、私は受け入れられないように感じたし、「いや違う、Rogersはこういうことを言っているわけではないはずだ、そしてもっと厳しい人だったのではないか」と思っていた。厳しいというのは態度や口調や、ましてや相手を否定することではなく、むしろ相手を“受け容れるために”、深い洞察が必要であり、甘さのない目を持ち、何より、自分に対しての厳しさをもっておられたのではないかという気がしている。だから私は、「肯定」という言葉に注意を払うようになり、肯定にも、浅いところでの肯定や、相手との関係を深いところで実感しての肯定（「共感」はこれに近いのかもしれない）などいろいろなレベル

での肯定というものがあり、場の雰囲気に流れてしまう“得体の知れない肯定”には用心するようになった。「それはRogersのいう肯定ではないはずだ」と思い、簡単にはわからなくてもいいから問いを立て、「先生、ここがわかりません」、「Rogersは何が言いたかったのでしょうか?」、「これは本当かな? 私はこんなふうに感じるけれど」と、率直に、先生と話をしてみたいと思っていた。しかし先生に問うことはRogersを非難することと受けとめられはしないかと恐れ、“感じたままに”先生に向き合うことは怖かった。このような思いは次第に、「他のゼミ生のように素直に“わかることのできない私”として劣等感のように募り、居づらく感じた。ゼミ生は皆、とてもよい人たちばかりなのである。でも“わからない”という思いを抱えたまま、ゼミにすることはできなかった。私がある時期からゼミに出なくなったのは、私の精一杯の“ありのままの自分”の在り方であった。

ただ、私は信じてもいた。このような自分のゼミでの在り方を、私は「村山牧場の牛」と喩えるが、それには多くの学生が先生の広い牧場に放し飼いになって“在る”というイメージがある。このイメージで重要なのは、「先生は、学生ひとりひとりを、“見捨てることなく”ご覧になっている」ということである。私は先生のことを厳しい方だと思っており、そのひとつには、先生が学生を“自由にさせて”おかれるからということがある。自由とは、厳しく難しいことであって、先生のお立場からすれば積極的に指導を入れ「これはだめだよ、こうなさい」と“管理”する方がよほど楽なことだろうと思う。しかし先生は「だめ」や「失敗した」という言葉を嫌がられ、私も何度か『失敗という言葉は使わない方がいいね』と言われたことがあった。それは忍耐の要ることであり、“待たなくて”はならないことだと思う。「何を?」。“その学生が自分の力を発揮できること”（「成長」というかもしれない）を。だから私は、論文がうまく書けなくてもがいても、「PCAなんてよくわからないや」とふてくされ

てあっちの方向を向いていても、自分の中にまだどこか捨てきれないものがあることを“みつめて”いて、村山牧場の中で、時に仲間の馬や羊と群れ、時に広大な牧場の端まで行き、時に柵を蹴飛ばしながら、「それでも先生は私を見捨てない」と信じていたのだと思う。

幸いなことに、長い間、問えずにいた問いを発する機会が期せずして訪れた。大学院を修了して2年、ゼミに参加させてもらう機会を得た。今年度のゼミ生は全員社会人学生の“熟年ゼミ”である。折しも COVID-19 禍にあって1回は7月にオンラインでの、もう1回は10月に講義教室でのゼミで発表の時間をいただいた。以下に、主にその2回目のゼミでの話をもとに、本稿の主題である村山先生の教育、指導の特徴を述べていく。

III. ある日のゼミ；畑中

1. ゼミ発表「自分の内側にある力」について

その日、私は某学会誌に論文の投稿をしたばかりであった。執筆する中で「人の内にある力を信じるということ」について考え、その過程で Rogers の本 (Kirschenbaum, H. & Henderson, V.L., 2001b) の中に「meaningful」という言葉を見つけた。これは博論のテーマで扱った性の幸福論に関係する概念としての「well-being」よりも、より今の私の感じ方としてフィットするように感じたので、まずそのことについてゼミで話したいと思った。しかし、これはゼミが終わってからわかったことであるが、実は私にとってより重要なことは以下のことであった（ゼミ発表のために配布したレジュメより抜粋）。

①修士の頃から、人に生得的にそなわっていると思われる特徴とされる「ポジティブ (positive) とか、前進的 (forward-moving) とか、建設的とか、現実的 (realistic) とか、信頼できる (trustworthy) というようなもの」(村山, 1967) という言葉に関心を持っていた。
⇒「自分の内側にある力」について知りたい。

人が、自分の力（を持っていること）を信じるにはどうすればよいのか？

人が、自分の力（を持っていること）を信じるとはどういうことか？

②この関連で「人間は能動的で、実現的で、一定の方向に進もうとするのである」(村山, 1967) ということについて考えた。

ところがゼミでは、私がかちんと提示することができなかつたため、この部分が埋もれてしまった。そのことに村山先生は、鋭く目をつけられた。

まず、先生にとって meaningful という言葉は印象に残っていない言葉であること、ただ、この言葉をご覧になって思い浮かんできた言葉として、Rogers の「free functioning person (十分に機能する人間)」を挙げられた。『それは継続的にその人が持っているものじゃない、そういう状態だ、というふうに僕は理解している』とおっしゃり、『free functioning person の一つの側面』として、「open to experience」について言及された。『“経験にひらかれている”。つまり経験を、言葉でごまかさないということが強調されている』こと、さまざまな「べき」論から離れ、『自分がやった経験そのものを味わう』といったニュアンスであることを述べられた。さらにもう一つの言葉として、Gendlin の「体験過程」を挙げてフェルトセンスや Rogers の process scale について話され、『体の実感からいこう、体の感じを大事にしよう、言葉じゃなくって体に問いかけろ』ということがフォーカシングであること、そして『あなたがいう meaningful かどうかわからないけど』と断られた上で『人間は、意味を作っている』という話をしてくださった。

先生は、このように私の挙げた meaningful という言葉から想起されたことを押さえた上で、これこそが実は私にとって重要な問いである「自分の内側にある力」について語ってくださった。先生にとってのそれは、『自分の弱さを受け入れること』であった。先生が京都大学で哲学を目指し、心理学に転向される過程での

多くのエピソードを語られながら、そこから学ばれたこととしての『僕の今の哲学』なのだとおっしゃった。『自分のできないことをきちんと受け入れる。それは自分が駄目ってということにはならないんだ』、『弱いってことを認めるってことは、すごい大事な、自分を肯定してることなんだ。それと闘わなくていい。そうすると自分のやりたいことがたくさん見えてくる。自分のいいところが見えてくる。極めてシンプル』、『つまり、哲学的に言うとな弱さを認めるってことは強さなんだ』。パラドックスです』とおっしゃった。しかし同時に、『受け入れるってことがどれほど大変か』との実感を述べられた。生の言葉である。先生のこういったご実感が先生のセラピー観にも表れないはずはなく、『カウンセリングの目的は多分、批判されない感じの中で、そういうことをクライアントが体験する。“私、こんなぼろぼろの人間でも、意味があるよね”って感じを相手が持ってくれるってというのが、いわば、PCAのセラピーの目的なんだ』という言葉につながった。ご自身の体験を通じてこそその言葉であることを感じた。

これら先生ご自身についての話に続いて、先生は今度は私に、「自分の内側にある力」についての投げかけをされた。『これは概念じゃない。つまり、あなたがどういう生き方をするかとか、どういうものを大事にするかっていうのを（自分に）問わないといけないんじゃないか。外に「well-being とは何か」とか「幸福とは何か」っていう問いじゃなくて、「私が幸福とはなんだろうか」、「私が幸福と思っている感覚は何なんだ」、そういう問いかけをして欲しい』とおっしゃった。これは私にとっての open to experience に関わる投げかけであり、「自分の内側にある力」について“私がまず”語ることを求められたということである。つまり、「畑中さん、あなたは どう思いますか？」という問いなのだ。

本稿を執筆するにあたってこのことに気づいて私は、大きなショックを受けている。これは先生が CSP 時代に Rogers から受けられた

「Shoji、君はどう思う？」と同じ類の問いかけではないか。この日のゼミの 90 分ほどの時間の中に凝縮して語られたいろいろなことごとには、先生の生き方が“person-centered”であることが垣間見えるが、その象徴のように「あなたは どう生きているのか？」という問いを、私は今まさに先生から受けた。なんということ！「答えはあなたの内側にある」ということはどこかに書かれた言葉であったか。先生を通じて、Rogers からの問いが届いたようにさえ感じる。「自分の内側にある力」というテーマは、実はいろいろな要素を含んだ普遍的なテーマであり、先生がご自身の哲学である『弱さの強み』について『自分が生きてきたプロセスとか、自分が生きている上で大事にしていること』として語られた意味の重みが後になって感じられてくる。それほど、大きな問いなのである。

2. 先生の驚き／「成長」のプロセスについて

この日のゼミでは、先生は最近『軽いショック』を受けていると話された。それは、私とゼミ生 A さんの変化についての話だった。先生からご覧になってこの 2 人は、『独立独歩』で歩む私 (!) と、拠って立つ理論の『やってることから見ると、《Rogers》から非常に遠いようにみえていた』A さんなのであるが、それぞれの研究を深めていっている中で“どうも Rogers の理論が彼女たちの中に入っていているみたいである”ということを感じられた驚きであり、『うれしい感じ』であるらしかった。以下、先生が主に私について話されたことから 3 点について記す。

1) “学ぶ”ということ

ゼミに長く所属していた私に対し、先生としては Rogers の理論について『相当、話したつもり』でおられた。けれども、“畑中は「聞いてない」みたいなこと言う。そして最近になって《Rogers》のことを言い出した”。これは何か？

『つまり耳が聞こえない時はね、入らないんですよ、人間って。いくら知識をやったって。

“やっとそれを聞こうという、自分の中に、あるセンサーができてきた”ってことだけです。言葉が入るのは』とおっしゃった。しかしそうだとしてもそれはなぜなのか。このことについて先生は、『Rogersが狙ってることっていうのは、理論ではなくて、人間の持っている、“その人の実感”とか、“感触”とか、そういうものに触れた理論なんです』。『つまり《Rogers》をいくら説いたってだめなんだ。でも研究をやって自分が深めていく中で、どうしても自分のやっている具体的なこととか、自分の生きてる具体的な感触とか、そういうものにぶつかるんだな、という』、『もっと正確に言う』、『自分の実存とか、自分の在り方みたいなものに接近し出して、そうするとそういう時どうしても《Rogers》が入ってきた。《Rogers》とまともにぶつかったりとか、“それにどんな意味があるんだろうか”っていうことを調べるような気分になったり。それは僕の言葉で言うと、自分と向き合うということが、さらに研究を発展していく時に大事なんだ、という感じ』であるとおっしゃった。そしてそれは私が『“探す”から』であり、探究は人生の最大の大事なことであって、『研究なんていうのは結局、問い』であり『どういう問いを出すかが決め手になるんだから。そういう時にやっぱり、研究を深めていくと、PCAみたいな発想が出てくるんだな』という感じを持たれたのであった。それは『Rogersの考え方に惹かれたからいい、悪いてそういう話じゃない』、『ただ、確かにRogersのひとつのメリットは、自分と向き合うっていうことを彼はセラピーの中で一番大事にしてきた考え方ですよね。ですから、そういう形がみなさんの中でちょっとずつ起こってるのかな』ということを感じられたのであった。そして先生の教育のスタイルの表れでもある村山ゼミの在りようが、『こういう形でやっていくのは、そういう意味では自分の魂にぶつかるっていう意味で、いいのかな』という思いを持たれたようである。“村山牧場”のイメージを描く者としては、大いに同意である。

学ぶということは時間がかかるものなのだろう、そしてまた単純に時間の問題でもないのだと思う。私は今、自分がゼミで辿ってきた道のりについて、それまでバラバラで何の意味があるのかわからなかったことが、ある時、急にふーっと、「あー、こういうこと！」という感じでつながったように感じている。“わかる”という言葉を使うのは適切かどうかかわからないが、『ここに来るようになっていたのか!』といった感じである。このように話すと、先生は『そうなんだよ。そう、そうそう』とおっしゃった。現役のゼミ生であった時には「私、わかりません」と言えなかった。でも遠回りであってもついに今、時が巡ってきたことに価値が感じられる。恐らく明確な答えを求めているのではない。「あぁ…」というこの“感じ”が大事なのだと思う。そしてこれからもまだ、探し続けるのだらうと思う。

2) Rogersの理論

先に述べたように、私は「《Rogers》って何なのだろう？」とずっと思っていた。その「わかるようなわからないような」、「好きなような気がするけど嫌いなものかもしれない」といった思いをついに“告白”した。すると先生は、『あのね、一言、言ってしまうと《Rogers》は、簡単で一番難しい。セオリーはシンプルです。でもそれを体験して、深めるのは、一番難しい理論です。多分ね』。『言ってることは本当、簡単なんですよ。でもそれを実感するためにどれだけの、体験と、人との出会いとか、そういうものの中で生まれてくるみたいな、そういうなんかこう…』。先生が語尾を明言されずに言葉が迷ったままとったことや、これらの問いとも答えともつかない話に、『Rogers』の『簡単で難しい』ということが表れるというものであろうか。先におっしゃった『自分の実存とか、自分の在り方みたいなもの』への接近など、『ま、ある意味で、生きていく上で、はみ出ることができない問いみたいな。“自分”』っていうね。そういう、もう心理学っていうよりは、何て言うんかなあ、なんて言ったらいいのか、宗教っぽいって言えば宗教っぽい

し、修業って言えば修業っぽいし、っていう。つまり、“答えのないプロセスを生きていく”っていう、そういう世界だなあ、とは思いますがね。余韻に、先生を以てしても語れないものを感じた。それが先生のおっしゃった「修業」というものに関係するものだろうか。『カウンセラーになるために、修業するっていう感じはね、持ってないんですけど言葉がね。やっぱり“長い時間かかったなあ”みたいな、ついやっぱり修業っていうのが出ちゃったんだなあって』との言葉に、先生が歩んでこられた“時”の深みがにじむようである。それはやはり、Rogersのもとに学ばれ今に至る、先生にしか語れないものなのだろうと思う。

3) 育みのプロセス／「待つ」ということ

先に私は、先生は厳しい方であると感じていてることを述べたが、自由を与えられているということは学生にとっても苦しいことである。大学院として定められた、例えば修士論文であるとかそれに関係する何回かの発表の機会などあるにはあるが、極端に言えばそれさえもせずに済ませてもいいのである。社会人も多い専攻なので、背景も経験も、何より個々人のテーマが様々なので、その分野についても先生は一から“勉強”をされていることだろうと思う。表面上だけでもそのような具合であるのに、さらに“その学生”の個人を見据えた指導が必要になるのだ。ある方針を示して「このようにしてはどうか」、「このやり方はダメだ」と言うのは簡単であるが、それは“その人”を生きることを妨げないか、そのあたりの先生のフラストレーションは、私自身、教育に携わる身としても想像を超えるご負担であろうと思う。“自由”の意味がわかれば、学生は苦しい。そして先生は、その学生を“どこかの地点に”軟着陸させなくてはならない。沼や樹海に突っ込んでいきそうになる様は先生からはよく見えることだろう！しかしそれだからこそ、個々の学生の成長がみられた時には冥利に尽きるであろうことも想像できる。

ゼミ生時代、間違いなく手のかかる学生であったろう私が、今、先生にとって“よい学

生”に“成れ”ていることを願いたい。この日のゼミが終わってから、先生は私に『ゆっくりでいい』とおっしゃった。『meaningful っていうのは僕にとってあんまり大事な言葉じゃなかったんだね。僕の中に残ってなかったから。ただ、あんたは「これだ！」と（固定的にこれこそが良いと）思って、当てはめてしまったらダメだよ。待つ。ゆっくりでいい。自分の心の中にわいてくる言葉を待つ。じっくり寝かせる。ウイスキーと同じ。大丈夫。あんたは絶対に、大丈夫だから』。これは手前味噌の話でも私個人についてだけの話でもないと思っている。先生の、“数多い学生の中のひとり”の話であり、先生からはひとりひとりに向けられたそれぞれの言葉があったはずである。村山ゼミはその学生たちを育む“醸造所”なのだ。琥珀色の深い、よい香りのする“ウイスキー”を思った。

IV. ゼミ後日談／思索を通じて考える 村山スタイル考；畑中

1. 私の課題としての「書くこと」

1) “何が”「書けない」のか？

どうやら、私は自分の“体験をありのままに”表現することが苦手なのではないか。そして「書く」ことはその一表現型であるので、私が“自分の感じ、体験したこと”を「書けない」と感じていることには通じるものがあるのだろう。Rogersの言葉で言う open to experience に関係するところであり、先生から“畑中さん、あなたは どう思いますか？”との投げかけをされた部分である。まずはこの辺りの思索を通じて村山先生の教育スタイルを考えてみる。

具体的に、“何が”書けないのかというと、私は性教育を臨床心理学の視点をもって行っており、子どもたちが心で感じることや何らかの変化をもたらすことを狙って授業をするが、「そこで何が起きているのか」ということが書けないのである。論文なり本なり、“自分の感じ、体験したこと”として『自分の言葉を

使』って書くということをどのようにして表すことができるのかわからないのである。特に在学中、「(論文が) 書けない」ということは、学位取得を希望していた私には致命的に思えることだった。自分のテーマに関する研究が、やっていることの性質から数量的な研究法で何かを見出すことが適しているようには思えずに困っていた。しかし同様のことは、もしかしたら心理臨床の、例えば面接の場面でも起こっているのではないか。そうだとすれば、「書けない」で苦しんでいる者は私一人でもないように思う。

例えば、授業をしている時に、ふと、予測もしていなかったことが起こることがある。それは「空気」という言葉がキーワードになるかと思うが、或る何かのワークや話をした時に、子どもたちからの反応に独特のものが感じられることがある。それは「ぴーんと透き通ったような」感じであったり、子どもたちの動きがびたっと静止する瞬間の訪れであったり、こちらが圧倒されるような「あぁ！」と響いてくる熱気や圧であったりといったようなものである。ことによっては、「大体、こうすればうまくいくのではないか」というような、そこに至る持っていき方もありそうだと自分では感じている。しかしそれはノウハウで伝えられるものでもないと思うのである。こういったことを、私はずっと、どのように表せばいいかわからずに来た。修士の頃には、授業の様子をビデオに撮って、授業中に「何が起きているか」を“見ようと”したことがあった。“見てみたい”し、残しておきたいと思い、もっといえば、その頃の私は、自分のやっていることに“エビデンス”もほしかったかもしれない。論文を書くということにとらわれ、一時期、「研究」が先にたってしまっていた時期があった。そんなある授業では、子どもたちの様子からしても充実した時間になったので、「いい記録になっただろう」と自分では思っていたのだが、後で見ても、授業の最中には感じていたようなわくわくした感じや子どもたちの細かな様子は“残って(=録画されて)”いなかった。発言

や笑い声、「へー！」というような音や人の動きといったものは映っている。しかしあの、“確かにあの場で感じたこと”は画面には映らない。勘違いをしたのかと思うほどであった。そればかりか、余計な意識が働いてしまってその時の“今”の空気を全く楽しめず、素の感じを味わえなくなってしまっていた。常にどこかで研究を意識した授業はおもしろくなく、一時期すっかり興味を失った。本末転倒である。このことに通じるものがあるだろうか、Rogers (Kirschenbaum, H. & Henderson, V.L., 2001b) は以下のように述べている。

・【上記の結果として、私は教師 (teacher) であることに興味を失ってきていることを悟った】

ここでいう「上記の結果」とは、「他人に教え方を教えることはできない」ということに纏わる Rogers の徒労感である。これに先立つ文章がある。

・【行動に意味のある影響を与える唯一の学習は、自分で発見したものであり、自分のものにしていった学習であると、私は感ずるようになってきた】／【このような自己発見した学習、つまり自分のものにし、経験の中に同化してきた真理は、他人に直接伝えることはできない】

この文章を読んで私は、「やっぱりそうなのだ！」と思った。自分が体験したことを人に伝えようとしたり記録したりすることは難しいことなのだ。と同時に、とても逆説的ではあるのだが、「では書くことをあまり恐れずにいてもいいかもしれない」と思って勇気づけられもしたのである。それは Rogers にして「真理は他人に直接伝えることはできない」ものであるのだから、“まずはとにかく”、“誰が読む”とか「何のために」などを自分から取り払って、思い切り主観的に書いてみることを試してみてもどうだろう？ このように思ったのには、次で述べるように、先のゼミで感じたことごとが影響している。

2) 『Next one』への歩みとしての「書くこと」

実は私は博士課程を修了後に、村山先生から

『畑中さんは今までやったことについての本を書いたらどうかな』とのご提案をいただいた。過分なことであり、願ってもないことであった。ところがそれがどうもうまくいかず、行き詰まって困っていたところ、7月のオンラインゼミで発表の機会をいただいたので、この件についてゼミで話をしたいと思った。単に「本が書けない」ということであれば、ゼミで相談するようなことではないと思う。しかし“何か”、それだけではないものを自分でも感じていたのだろう、ゼミの皆さんに力を貸してもらえたらと思ったのだと思う。つまり、「自分の内側にある力」についての先生からの“あなたは どう思うのか？”という投げかけと、本を書くことを勧められたことは何らかの関連がありそうであり、この探求を通じて、もし1本、自分でも「これ」と思えるものが書けたら“何か”が見えるのかもしれない、というところでのヒントが得たかったのである。先生は、私が「書けること」に何か意味を見出してくださっていて、何かを予測されているのだろうか？ そうだとしたらそれは何であろうか？ この意味を考えることもまた、村山先生の教育のスタイルを浮かび上がらせる一助となるのではないかと思い、ここに幾つか、問いを書き出してみる。

- ・ [先生が本を書くことを勧めてくださったのはどうしてだろう？]
- ・ [“自分の感じ、体験したこと”が書けるとはどういうことだろう？]
- ・ [今の目標として、どうして私が“自分の感じ、体験したこと”を書けることが大事なのだろうか？]
- ・ [なぜ私は、そのこと（書けるということ）を確かめたいのだろうか？]

博士論文も書き終え、書くことは本来「ねばならぬ」ものではないが、それでも私は自分でも「書きたい」という気持ちを持っており、そのことが探究を続けることとなって“今のこの私”につながっている。本という、学術論文とは異なる枠での自由な表現を許される中で、私が“自分の感じ、体験したこと”を書くことができるのであれば、やはり書くことを通じて私

は、“今、見えていない何か大事なもの”をみつけないと思う。「畑中の言葉をみつける」というのが2回のゼミのテーマだったのだろうと思う。それは恐らく、次のステップに歩むための、先生の言葉で言えば、『Next one』として、書くことによって見えてくるものであるかもしれない。

3) 個人にとってだけではない「書くこと」の意味

またこれらのことは、私はとても個人的なことだと思ってきていたが、ある日のゼミで先生は、社会的な意味をもつものである可能性に言及された。論文で「自分の言葉を使うこと」、「自分の臨床体験をそのまま書くこと」、そして例えば Rogers と比べてやってみて「自分の体験レベルで”確かめようとする”こと」が大事であり、「Rogers はこう書いていますが、自分としてはこういう感じがしています」というふうに、『自分の体験、やったことを引っ張ってくる。それを論文と照らし合わせる』ことが大事であるとおっしゃった。そのような『自分の体験を書く』記録は、“人は同じ経験ができないが、人の記したもので知ることができる”、つまり、社会への還元になり得るということである。

以前、先生と話をしていた時に、『臨床心理っていうのは、社会に役に立つものでなくちゃいけないと僕は思っているんだ。そこが課題なんだ』と伺ったことがある。先生の持つておられる使命のようなものを感じる言葉であり、私も初心に戻るワードとして、自分のやっていることをそこに何度も立ち返らせて考えなくてはいけないと思っている。“自分の感じ、体験したこと”が書けるということは、単なる個人にとっての作業だけではなく、社会的にも意味の有るものになり得るということを先生は教えてくださっているのだと思う。実際には、今の時点では「書くこと」は私にとって難しいことであり、それは《Rogers》にも示されていることである。しかし「もしも」、うまくいく“やり方”をみつかることができたとすれば？ 10月のゼミの日、帰る前に先生はこう

おっしゃった。『畑中の哲学をやれ。これは哲学なんだよ』。ゼミでは、哲学を目指しておられた先生と、“人が生きていてってなんですか？”という哲学を語っている。そういったところに《Rogers》が出てきた、ということである。『じっくり考えなさいってことは院生としてこれから論文を出すという人には言わない。書けなくなっちゃうから。そこは教師として踏まえてますよ』。だから私は、この新たな“自由”の中で、先生のおっしゃるように、安心してチャレンジしたらよいのかもしれない。

以上、「書くこと」について述べてきたが、現時点での私の現実的な関心として「ものを書くとは？」ということについて考え、“体験を書くということ”について思い浮かぶことをまとめてみた。

《“体験を書くということ”について》

- ・文章を書くこととは；言葉を探さなくてはいけないということ。丁寧に。厳選して。
- ・言葉をどこから探してくるか？；自分自身の感じ（内側にあるもの）から。
- ・作業の特徴；感じを味わう、みつける、出会うといったようなもの。既成の（誰かの）言葉に当てはめるのではなくて“自分の言葉にしてみること”。
- ・困難と思われること；難しい。どう書いたらいいのかわからない。この、目にみえないものをどういうふうにしたら書けるのだろうか？
- ・その困難について思うこと；この作業の過程で起こることが、私にとって重要な意味をもつことなのかもしれない。
- ・関連して思うこと；「腑に落ちる」という言葉はおもしろい言葉。「腑」は、「はらわた」「臓腑」のこと。昔は「腑」は「考え」や「心」が宿るところと考えられていたとのこと、フォーカシングに通じるものがある。そのことを昔の日本人は、感じていたのだろう。“体験を書く”ということは、この、「腑に落ちる言葉」を探すことなのだろうと思う。
- ・参考になる文献からの引用；「気持ちというのは、一種のからだの感じ」、「体験される“か

らだ”は、いろいろなことを知っていて、いろいろなことを感じている」（池見，1996）

2. 村山先生とのエピソードからみる教育の形

1) “The encounter group”の“Mr.Facilitator”

私は海の近い先生の山荘に2回、ゼミ生と連れ立って遊びに行ったことがあるが、それは特に何をするという目的もスケジュールもない“旅”であった。先生も含め現地には三々五々に集合し、食事をする時以外はそれぞれが好きに過ごしていた。2回とも、どちらかといえば日頃ゼミではあまり話をしたことの無い者同士の集まりであり、誰が行くとも、誘い合うともなくその日に都合のよい者が集まったに過ぎない。しかしこの旅は、エンカウンターグループに関する様々な理論など全く必要としない、“これこそがエンカウンターグループ”というものであったのだろうと私は思う。そして先生はそのファシリテーターであり、先生の生きておられることそのものがPCA的であるという感じを強く持った。先生は生来そのような方だったのだろうか？ それともこの道におられるうちに、であろうか…？

そのヒントはどうも次のような辺りにありそうである。それは、先生の『弱さの強み』の哲学では、『同時に』、出会いの大切さについて、『そのためには、自分を理解してくれる人、批判しない人、サポートしてくれる人、そういう存在が絶対に必要なんだ』ということが語られた。そのお話からも、先生がなぜグループを大切にされてきたかということや、人が集まる場での気遣われ方や言葉の端々に表れるものがあり、現在の先生の心理臨床家、また教育者としての在られ方に得心するのである。

2) 個人的な想いをもつエピソード2選

私にとって個人的に意味を感じる、先生を表す2つのエピソードがある。一つに、私の博士号取得の審査が近いある日、一通りの作業を終えて先生を駅までお送りする車の中で先生がおっしゃったことがある。『教員っていいのはね、産婆だと僕は思っているんだよ』。その時、

私は自分が助産師であることもあり、人が何かを“産み出す”ことの手伝いとしての職業上の共通点を先生に見出していたように思い、純粋にうれしく思った。しかしその言葉の意味をより深く認識したのは、その後、一年以上たった頃に先生からいただいたメールの中でのことである。その頃、学会誌への投稿に苦戦していた現役のゼミ生2人が、ほぼ同時に採択が決まるということがあった。その報を受けて私もうれしく、折しも村山先生とメールをやりとりしたお返事の中に「産婆術」の言葉が出てきた。先生に許可をいただいて引用する。

『畑中さん メール、ありがとうございます。拝見していて、(畑中の学位取得時のエピソードなど) そうだったか、なるほどとうなずきながら、いろいろあったな、など畑中さんの人生の博論作成という過程にお付き合いできた喜びを感じました。その点が大学院教員の醍醐味と感じています。私は教育とは、産婆術と思っています。問題意識、熟成、主役は院生です。○さん、△さん、□さんとそれぞれ違います、でも共通点もある気がします。言語化できませんが』

このお返事を読んだ時、「あぁ、そうか!」と思った。恐らく、以前伺った時には自分が当事者であり、気持ちも高揚していたために浅いところでの聴き取りしかできていなかったのだろう。時が経ってからの先生のメールの言葉は、自分のことから少し距離を置いて「改めて出逢う」機会となり、よりくっきりと言葉の意味が理解できた。それは、先生は、ご指導を通じて院生の人生の歩みに伴われ、院生が“産みだす”ものや力を、じっと傍らでみてきてくれたのだということである。そして先生はまさに私にとっても、私の人生の歩みに伴って歩んでくださった“産婆”なのだ。

もう一つのエピソードは、私の博士の学位取得が教授会で審査にかけられた日のことである。先生から報される結果を待っていた時のこと、私は先生の研究室の前におり、先生が廊下の遠くからこちらに戻ってこられる場にいた。私をみつけられても表情を変えずに黙ってこちらに向かって歩いてこられた先生は、私の前で

「すっ」と手を出され、『おめでとう。これはあんなのがんばりだよ』とおっしゃった。膝からカクンと崩れそうになりながら、映画のワンシーンのようであったその場面を私は“絶対に忘れない”と思った。

文中でも述べた、「それでも先生は私を見捨てない」と信じていたことは、そのものがPCA的な先生の在られ方によるものなのだろうと思う。『あんなのがんばりだ』とおっしゃったのは、単に論文を書くために費やした時間や調べたものの数といったようなものことではなく、「あなたが、自分の人生のテーマに取り組んだ、これはその結果だよ」というふうに言っていたと私は受け取った。それは先生の牧場の“放し飼いの一頭の牛”が、自分が“ここに居ること、在ること”を確かめることができた瞬間だったように思う。そして他の多くの村山牧場の者たちにもそれぞれにとって同じく存在する、そのように思わせてくださった《Shoji Murayama》によるものなのである。

V. 自己実現モデルの展開—村山正治の院生指導論—；村山

1. 自己実現モデル

私はこれまで、1974年から現在まで46年間、九大、九州産業大、久留米大、東亜大の大学院で院生たちの研究・臨床体験・論文作成の指導にあたってきた。その体験から「科学者—臨床家」「臨床家—科学者」という従来の臨床心理士・公認心理師の指導パラダイムの前提と異なる「自己実現モデル」(村山, 2015)を開発し、院生指導の軸に展開してきた。そのポイントは、①研究方法より問題意識、関心の重視、②院生自身の研究の鉤脈探し、③臨床経験と研究とを乖離させない傾向、④リソースネットの活用、⑤臨床経験から経験則を導き出す、である。

2. 院生個人の成長促進の留意点

①院生個々人個人の特徴を知る機会を作る、

- ②迷いを許容する、③院生各自の心理的成長は個人差が大きい、④成長を待つ忍耐と楽しみ、⑤ひとり一人の在り方を尊重する。

以上の5原則を大切にしている。

3. 畑中論文が示す村山像

私はこうした哲学を持ちながら、大学院村山ゼミの運営を行い、自己実現の方向で生きている様々な院生が育ち活躍していることは、私の教師としてのささやかな誇りである。

本論文は東亜大学大学院で5年在籍し、臨床心理学博士号を取得した畑中美穂が、このような私のつくり出した心理的環境で研究活動、ゼミ活動を通じて、私の自己実現モデルの特徴を体験的にクローズアップしてくれた興味深い論文である。

コメントはさけておきたい。論文を読んでいただき、読者がそれぞれの感触を大切に、何かをつかんでいただければ、畑中も村山もとてもうれしいことである。

VI. おわりに；畑中

大学院を修了してからのゼミでのことごとを中心、村山先生の教育スタイルについて述べた。指導の中での具体的なことは、ほとんどが村山先生が直接的な言葉を用いられたものではない。先生がなさることは、“私が答えを”みつけるまで辛抱強く、“私の気の済むように探索することを”待って（信じて？）くださっている、ということだと思う。だから、先生はとても厳しいけれども、多分私は、大丈夫であり、つまりはこうしたことすべてが、私が、私のスタイル、私が生きやすくなる“これ”という核を育てるための村山先生の在りようであり、“畑中美穂というひとりの学生を育てる村山正治の、教育”なのではないかと思う。その先生の師である「ロジャーズの観察した事象や説明概念の中には“過程”を重んじるものが多数見受けられる」（池見，2001）とされる。私が大学院に在籍したのは5年半のことであるが、それはそれまでの私の経験を束ねる時間で

あったと同時に、“ここ”から先の私の歩みに向かうためのひとつの土台であり、一連のプロセスの重要なひとつの地点であると感じる。本稿で記してきたことは現時点での私自身のまとめのようなものであるが、これらは村山先生が私にこのように考える題材や時間や場や機会や、何より、“このように私が今、在ること”を、待つともなく待ってくださったという先生の教育のスタイルがあってこそのことである。私の今のこの地点は、私が生きる長いプロセスの中のプロットの一つであり、“学生の数だけある村山教育のひとつの形の表れ”としての現時点での事実なのだと思う。

最後に、村山先生、また修了生の私の出席を快く受け入れてくださったゼミ生のみなさんには深く感謝申し上げたい。先のゼミを終えた時、私は「中期こそ、《Rogers》を！」と思っていた。確かに《Rogers》はいつ読んでもその時々読み方のできるものかもしれないが、今こそ、村山ゼミで先生とともに、《Rogers》を味わいたいという思いがするのである。そしてその折々にまた、先生の言葉で言えば『Next one』として、新たな語録が産まれるのだろうと思う。

文献

- 畑中美穂（2018）：幸福感（well-being）を高めるものとしての性の心理的意義—性教育および性行動の観点から—。東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理学専攻博士論文。
- 池見陽（1996）：傾聴とフォーカシングの臨床心理学。聴能言語学研究，13(3)，213-220。
- 池見陽・峰山幸子・高地知子・蓮沢典子・永井智子（2001）：カール・ロジャーズの心理療法論再考：著作 Client-Centered Therapy に見る観察事実と概念。神戸女学院大学論集，48(2)，185-205。
- Kirschenbaum, H. & Henderson, V.L. (Eds.) (1989). The Carl Rogers Reader. Mariner Books. (伊東 博・村山正治 (監訳) (2001). ロジャーズ選集 (上)(2001a)／(下)(2001b). 誠信書房)
- 村山正治 (編) (1967)：ロージャーズ全集 12 人間論。岩崎学術出版社。

- 村山正治 (2005) : ロジャースをめぐって 臨床を
生きる発想と方法. 金剛出版.
- 村山正治編 (2014) : 「自分らしさ」を認める PCA
グループ入門 新しいエンカウンターグループ
法. 創元社.
- 村山正治 (監修) ・井出智博・吉川麻衣子 (編)
(2015) : 心理臨床の学び方 鉅脈を探す、体験
を深める. 創元社.
- Tudor, Keith. & Tony, Merry. (2002). Dictio-
nary of Person Centred-Psychology. Wiley.
(岡村達也 (監訳) ・小林孝雄・羽間京子・箕
浦亜子 (訳) (2008). ロジャーズ辞典. 金剛出
版)

MURAYAMA's Analects, 2020Ver. —By Miho HATANAKA—

Miho Hatanaka^{*1}, Shoji Murayama^{*2}

Abstract

The purpose of this paper is focuses on describe the features about the education method of Shoji MURAYAMA by one of his student, Miho HATANAKA. The words he used showed that his education method and his way of life were based on the idea of “person-centered”.What was shown there was characterized by Murayama's unique student guidance, which trusts students as the existence of “Only one”.

Key words : Shoji MURAYAMA, analects, education method

^{*1} Lab. for psychological sex education, Mind and Life

^{*2} Graduate School of Integrated Science and Art, University of East Asia